

II 近親憎悪に終始した三三年の対立

このソ連の国民党政府との国交は、新中国成立直前までつづき、駐中国ソ連大使は、国民党政府が中国共産党におかれ、南京、重慶、そして広州まで逃げまわったのにつきしたがった唯一人の外国大使となった。しかもその大使ニコライ・V・ロシチンが、新中国の初代大使となつたのである（中嶋嶺雄『中ソ対立と現代』）。

したがって、新中国誕生の直後から、毛沢東が、何よりもまず、この屈辱的な中ソ条約を撤回させ、社会主義国家の自主独立と国家の尊厳をかけた交渉をスターリンとの間におこなわざるをえなかつたのは、当然であろう。

スターリンが日露戦争の雪辱としてかちとつた諸権益は、もともと中国の主権の下にあるものだった。そして、スターリンは、たとえその国の主権下にあつたとしても、強引に、合弁会社という形でその主権にわりこみ、自国のための物資供給基地に変えようとしたのである。

一九七九年夏、わたしは、日本人として初めて海南島を訪れた。海南島は亜熱帯の島であり、広いゴム園がひろがっていた。ところが、驚いたことにこのゴム栽培とゴム工場の設置は、スターリンの要求だったというのだ。中国側責任者は「寒い国のゴムの木さえしらないロシア人が技師として海口市に赴任してきた。彼らのために我々は五軒の別荘をたてた。借款返済の条件は、三年間のゴム生産をタダでソ連に送るといったものだった」と笑って語ってくれた。

フルシチョフによると、彼はスターリンと共に、生ゴムを資本主義国から買わない方法はな

いかと考へ、借款と技術援助（一）を与えるかわりに、中国にゴム工場を建てさせようとして、毛沢東に電報をうった。回答は、借款を与えてくれるなら、海南島にソ連の工場を建ててもよいというものだったので、協定書まで作ったが、「海南島に与えられた地域が少なすぎて大きなゴム工場を建てるわけにはいかず」と御破算になつたということだ。

また、スターリンは、好物のバイナップルの工場を中国に建てさせようと、マレンコフにメッセージを口述しはじめたのを、フルシチョフにおしとどめられたという。しかし、スターリンはこの計画に固執し、電報をうったところが毛沢東の返事はこうだった。「提案をうけいれる。借款を与えてほしい。そうすれば、われわれは自力で缶詰工場をたて、借金は、バイナップルの缶詰で返済しよう」と（フルシチョフ『回想録』タイム・ライフブックス編集部訳）。

ソ連資本の工場を建てるのが、いかに危険であるかを毛沢東は、ソ連の歴史的行為からの確に判断していたといえよう。

フルシチョフは、自分が中ソ対立の口火をきつた張本人といわれるのに怒り、もしスターリンが、もう少し長生きしていたら、対立は大っぴらになり、おそらく完全な国交断絶という形をとつたらうと『回想録』で述べている。たしかに、中ソ対立は、スターリン時代に発していることは明らかだ。それは東北地方に対するスターリンの領土的欲望をみてわかるだろう。しかし、問題なのは、このスターリンの欲望が、スターリンを批判するフルシチョフからブ

大破局必至の世界情勢の読み方

絶望の選択中ソ和解

菊地昌典



徳間書店

一九八三年十月